

意見陳述書

平成28年7月13日

小野久美

私は、福島県原町市、いまは南相馬市になりますが、そこで生まれ育ちました。

原町市出身の夫と出会い結婚し、8年後の平成11年に長女、さらに平成13年に長男を授かりました。

私たちは、実家で作ったお米や野菜、近所の人からもらう山菜などで日々食事をしていました。スーパーで食材を買うのはお肉などごく限られたものだけでした。

私や夫の親戚もみな地元におりました。義母はきのことりが好きだったので、義母が山で採取した真っ黒いきのこ「いのはな」で作る炊き込みごはんはとても美味しく、私たちの秋の贅沢でした。日々使うお水も庭先にある井戸水を使っていました。

豊かな自然に囲まれながら、2人の子どもを育てる忙しい毎日は今思えばとても幸せな日々だったと思います。

長女が小学校6年生となり、卒業式を目前に控えた3月11日、東日本大震災は起こりました。長女は学校にたくさんの友達があり、その友達と一緒に卒業式に参加する予定でした。

夫は当時、岐阜県下呂市に単身赴任していました。

私はその日、パートが休みで近くのショッピングセンターの駐車場に車を停めていました。

地元は地震が多い土地柄でしたが、その時の揺れは、初めて体験する突然下から突き上げるような激しい揺れでした。

地震後、家の中の片付けに追われ情報は見ている暇もありませんでしたが時間が経つにつれ私たちを取り巻く環境はどんどん変わっていきました。

市内のスーパー、コンビニ、小さな商店に至るまですべてのお店は閉まり、市内の小学校の体育館は避難所になりました。

そして、原発事故に関する様々な噂が飛び交うようになりました。

「原発でトラブルがあったんだ。だから大熊の辺の人たちは避難してんだ」
「家さ入って外さは出んって広報車が言ってっ」と

こういった情報を聞いて、私は、このまま幼い子供たちとここに留まっていのだろうか、と悩みました。

数日悩んだ末、3月15日、私は、とりあえず一時的に避難するつもりで下呂にいる夫のもとへ向かうことにしました。

車にはガソリンは半分で、県内ではガソリンの入手は出来ない状況でした。高速道路も閉鎖されていますし、下道も地震でガタガタでした。

こんな中どうにか新潟までたどり着き給油し、夫の元に到着したのは出発から14時間後でした。

知り合いや親戚など誰もいない 初めて来た岐阜県下呂市でした。

もともとは私も少し早い春休み程度に考えていました。長女の中学校入学までには地元の混乱もおさまり帰ることができるだろうと考えていたのです。

しかし、4月には地元は緊急時避難準備区域に指定され、南相馬市内の学校は、再開できないとの知らせがありました。私たちは仕方なく、下呂の学校の入学手続きをとることにしました。

当時小学4年生の長男は、近くの学校に転校し、すんなり馴染みました。

他方で、中学校へ入学した長女は、2ヶ月で不登校になってしまいました。原因はいじめでした。

ある時、長女の部屋の戸を開けると声を殺して泣いている長女を目撃しました。

たまに学校へ行っているとき、日記を見つけて開くと「死にたい」「消えたい」「福島へ帰りたい」「下呂は嫌い」といった言葉で埋まっていました。

その後最後まで長女の不登校が改善することはありませんでした。

長女は行きたかった高校へも行けず、通信制高校へ入学しました。

通信制高校では友達もでき、やっと落ち着いてきました。

そんな子供たちも今 高校3年生、中学3年生になり、岐路に立っています。長男は高校へ進学する予定なので 高校の近くに越そうかと家族の中で話しています。長男が高校卒業したら・・・まだその先は見えていません。

長女は 進学と就職、どちらにするのか決めかねています。

「中学の時にちゃんと勉強すれば良かった」

長女が最近漏らした言葉です。どうして不登校になってしまったのか。食事や言葉も全然違い慣れない場所。地元福島のように友達もいない環境に馴染むことは彼女には難しかったのだと思います。彼女の人生を狂わせたのは原発事故以外にないと私は思っています。

自宅は一昨年、家の周りの除染をしましたが思うように線量は下がりませんでした。しかし 再除染はしません。それが国の方針です。

国も県も帰還促進を強力に推進しています。借り上げ住宅の打ち切りや避難指示解除に伴う賠償打ち切りで 県外への避難者を追い詰めています。

そして自己責任だと言い放ちます。

事故から5年経っても、それぞれの避難家庭で起きているいろいろな問題は解決していません。

避難先に居続けるのか、福島に戻るのか、という悩みや、今後の生活は大丈夫だろうかという不安もつきません。

また、子供達を被曝させてしまったのではないか、生涯にわたり差別の対象とならないか、病に冒される可能性は、といったことも常に気になっています。

夫婦の価値観の違い、年寄り世代と育児世代の価値観のズレによって、家族間の軋轢を感じている人も多くいます。被曝の身体への影響、特に子供への影響は、まだ科学的に未解明なだけに、意見の対立が生じてしまうのです。私も、原町の義父に「避難していれば金もらえっから帰ってこねえんだべ」と言われたときはとてもショックを受けました。

私は、慣れない生活の全てを知らない土地で0から始める困難や、長女の精神的不安定に翻弄され、親族との軋轢にも疲れ果て、ストレスからか1度に上の歯が5~6本抜け落ちました。

県外への避難者約10万人が私と同じような悩みや不安を抱えています。

先が見えず、ろくな賠償もない中で、必死に生活基盤を整えようともがき続けているのです。

こんな事は福島だけで終わらせてください。

福島第1原発1号機は 昭和46年3月26日に稼働を始めました。平成23年3月11日は 稼働40年まであと数日というタイミングでした。

原発建設当初は、耐用年数が30年だったと知りました。ダメなものはダメだときっちり判断していたら 事故は防げたのではないかと感じてしまいます。

福島から避難している人々が 今どんな思いで生活しているのか想像してください。原発さえなければ と思っている人がどのくらいいるのか。

私たちのような被害を2度と出さぬよう、老朽化した原発はすみやかに廃炉にするよう、裁判所から命令を出してもらえるように心から願います。